横井小楠の学問と政治

沖 田 行 司

はじめに

横井小楠が生きた一九世紀の初めから中ごろにかけては、それまで日本の歴史が体験したことのない最も大きな歴史的転換期であった。その徴候は近世中期より既に幕藩体制の内部に進行しており、領主経済の行き詰り及び農村の階層分化や下級武士の没落等が社会構造の流動化をもたらした。ここに、諸藩の存亡にかかわる問題として藩政改革が提起される。さらに、幕藩体制を根底的に揺がす要因となったのが、欧米資本主義諸国の出現による「外圧」である。これら先進諸国に対する対外主権をめぐり、封建社会の再建という日本史が直面した個別的課題を、「近代」という世界的展望の下に克服しなければならなくなったのが、いわゆる幕末期である。

こうした歴史状況下にあつて、学問・教育は、リアルな現実認識と現状打開等を提供するものとして、政治の舞台に登場してくる。天保期を頂点として、諸藩では藩政改革の一環として藩校を創設または充実し、藩政を担う実務及び技術官僚の育成が学政一致の理念

の下におこなわれるようになった。教育が政治にとって欠くべからざるものとして位置づけられ、藩校の動向が藩政の方向を決定づける大きな要因となるにつれて、学問は極めて政治性を強めて行く。学問が政治との結びつきを強めることは、状況を切り開いて行く実践性を有したものにへと刷新されることを意味するのであるが、他面においては学問をイデオロギー化して政治に従属させることにより、学問の自立性を喪失せしめるという結果をもたらすことになる。

横井小楠は、儒学を根底的に問いなおすことにより、学問の内部から政治にかかわる主体の思想原理を創出するとともに、そこから時代の要求する様々な課題に独自の解答を引き出そうとした。特にその開国論においては、世界平和の実現を目指し、西洋資本主義の「戦争」政策を批判した唯一の思想家であった。この他に小楠の思想特質を示すものとして、福井藩に招聘されて藩政改革を成功させた経済政策論や松平春嶽を補佐しておこなった幕政改革に見られる共和政体論などが挙げられる。しかし、本稿においては、小楠の学

問論に問題を限定し、そこから引き出された実学思想と世界認識の特質を明らかにしたい。

一、「三代の治道」への過程

横井小楠は文化六（一八〇九）年、世禄一五〇石の肥後藩士横井大平の次男として生まれた。天保四（一八三三）年には藩校時習館の正課程を終了し、さらに研究を継続することのできる居寮生となり、天保八（一八三七）年に年一〇俵の扶持が与えられる居寮長に抜擢された。順当に歩んで行けば、時習館教授への途も開かれていたのである。

時習館は宝暦五（一七五五）年、藩政改革の一環として、六代藩主細川重賢により「人才鎔鑄ノ所」¹⁾として創設された。「時習館学規」によれば、時習館教育の目的は「其ノ耳目ヲシテ異物ニ触レズ而シテ遷シム。人倫ヲ敦クシテ英才ヲ育テ而シテ国ノ用ニ供スル所以也」²⁾と記されている。つまり、学校は道德的に人間を純粹培養する所と考えられていた。そのために、学校は「学校ヲ把テ一箇ノ官司ト作シテ看了ル是レ大ニ謬レリ」³⁾というように、藩の行政機関から独立して「別ニ一天地ヲ成ス」⁴⁾ものとして把えられ、行政は「簿書・刀筆・期會ノ事ニシテ教育ノ事ニ非ズ」⁵⁾という、教育と政治の分離の原則が打ち立てられていた。教育と政治に関して、後に小楠は福井藩の諮問に答えて、

人才を生育し政事の有用に用ひんとの心にて候。此政事の有用に用ひんとの心直様一統の心にとおり候て、諸生何も有用の人才にならんと競立、着実為己の本を忘れ政事運用の末に馳

込、其弊互に忌諱嫉疾を生じ、甚しきは学校は誼譚場所に相成候」⁶⁾。

と述べ、政治が教育に干渉することにより生じる諸々の弊害をあげている。このように、小楠は学問の中に、人格形成を含めて政治を見つめ、それを実践する視座を確立しようとした。しかし、時習館における教育と政治の分離は学問の非政治化をもたらし、学問の実践性を喪失させ、特に小楠が在学していたころの時習館教育は全く現実から遊離した訓詁詞章の虚飾の学となつてしまつていた。このような時習館教育の現状に対して、天保六（一八三五）年に上級武士の子弟を含む反乱計画が発覚したのを契機とし、時習館の改革がおこなわれた。この改革には長岡監物をはじめ小楠など後の実学党に結集する人びとが中心となり、藩の秀才や門閥の子弟が正規の課程を終了したのち自主的に学ぶ居寮制度を改革した。しかし、この改革の直接的な目的が「子弟の暴発を防止する」⁸⁾ところにあつたこともあり、居寮制度を正規の高等教育課程として位置づけ、選抜制とするだけに終り、時習館全体にわたるものでもなく、また時習館における学問刷新にまでは至らなかつた。従つて、その人材教育も藩政改革へ向けて質的に転換することもなかつたといえる。このころの小楠は学問に対する姿勢を王塘南の言葉を引用して次のように述べている。

天地の為に志を立て、生民の為に命を立つ。往聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く。学者発心の初、便ち須らく此大志願を立つべし。此大志願有らば然る後能く宇宙を量包し古今を度越す。¹⁰⁾

つまり藩財政建て直しの名目の下に、苛斂誅求に喘ぐ領民のためにも、今や廃れてしまった学問を本来在るべき姿に再興するという「大志願」を立てなければならぬというのである。また小楠は、居寮生として進級してきた元田永孚には「学を為すには須らく古今に通じ大義を明らかにし、活見を開きてこれを世務に施すべきのみ」とも諭している。このように、時習館の非実用的な学問に対して、「世務に施す」実用的な学問でなければならぬというのであるが、それが如何なる理念に基づいた学問であるかは小楠自身、明らかにするには至っていない。

天保一〇（一八三九）年に小楠は江戸留学を命じられるのであるが、翌年には酒失を理由に帰国を余儀なくされ、逼塞の処分を受けて後は時習館や藩政との一切の直接的なかわりを断たれてしまった。しかし、江戸から帰国後の小楠は藩の政治方針に対して「上の御難洪を下より救ひ奉る故に節儉を行はせらるると云筋に当り、是は節儉と云ふにて無く聚斂の政と云ふ者なり」と述べ、また藩営の専売事業が領民の経済生活を破壊するといひ、その中止を主張するなど、宝暦の改革以降の肥後藩政を鋭く批判するようになった。小楠の在野精神は、天保一四（一八四三）年ころより発足した長岡監物らかつての時習館改革のメンバーを中心とする実学研究会からさらに実学豪農党を通して、「三代の治道」という政治理念に支えられた学問において形成されて行くのである。このような小楠の学問転回の要因としては、江戸留学中に水戸藩士藤田東湖との交わりを通して後期水戸学に接触したことが考えられる。水戸学は徳川光圀による修史事業を中心とした前期水戸学の尊王思想を受け継ぎ、藤田

幽谷・東湖父子及び会沢正志斎等により天保期における内憂外患の危機状況を打開する改革理論として確立された。特に後期水戸学は国家的危機の自覚の下に、国体論を明示して尊王攘夷運動の理論を提供し、幕末の諸藩に大きな影響をもたらした。また、後期水戸学の学問観においては「学問・事業。不殊其効」というように、学問の実践性が強く主張され、しかも「治と教とは、その致維一」という治教一致の原則、つまり政治と道徳が連続して扱えられていた。こうした学問は「唐虞三代の道」に依拠するものであったが、但しそれは「乃若西土唐虞三代之治教。資以替⁽¹⁵⁾皇猷」というように、「三代の治道」を実現するのではなく、日本の国体を保持するための、いわば補助的なものと考えられた。故に、賢人に政治を譲る「禪讓」や革命を肯定する「放伐」などは万世一系の国体思想とは矛盾するものとして排除された。小楠は「程朱流の窮理を嫌い専ら事実⁽¹⁶⁾に心懸たる様子」と東湖の人物を評している他は水戸学については深く言及していない。そうして、文献上においても、水戸学と小楠の「三代の治道」を直接的に実証することは困難であるが、実学研究会のその後の経過から以下のような否定的連関が考えられる。老中水野忠邦が幕閣を去り、水戸斉昭及び藤田東湖が連座して塾居を命じられると、肥後藩においては実学研究会に対して「水府藩士ト意氣相通シ学風較似タルヲ以テ若シ此一派ヲシテ志ヲ得セシメハ吾藩モ亦幕府ノ忌ム所」と異端視された。これに対して元田永孚は「水府ノ学風ヲ効フニ非ス其異國ノ志ハ同シト雖トモ經國ノ道ハ見ル所亦異ナリ是常ニ四先生ト講熟シテ自信スル所」と、その相違を述べている。それでは、水戸学と異なる「経國ノ道」と

は如何なるものであったのだろうか。

治国安民ノ道利用厚生ノ本ヲ敦クシテ決シテ智術功名ノ外ニ馳セズ。眼ヲ第一等ニ注ケ聖人以下ニハ一步モ降ラス日用常行孝弟忠信ヨリ力行シテ直ニ三代ノ治道ヲ行フヘシ。是乃堯舜ノ道孔子ノ学其正大公明真ノ実学ニシテ世ノ人ヲ知ル者鮮シ。

既に述べたように、水戸学においては、「三代の治道」は国体主義を補完する二次的なものと考えられていたが、小楠及び実学党においては「三代の治道」の実現がすべてであり、そこに水戸学とは異なる「経国の道」があるというのであった。また、小楠も水戸学が排除した「禅讓」を肯定し、逆に国体論の要である血統論を否定している。

人君何の天職か。天に代りて百姓を治む。天徳の人に非ざるより何を以て天命に愜はん。堯の舜を異ぶ所以は是真に大聖たり。迂儒此理に暗し。之を以て聖人の病とす。嗟乎血統論。是豈天理の順はんか。

小楠はこうした学問を水戸学ではなく、朝鮮の儒者李退溪（一五〇一—一五七〇）及びその影響を受けた肥後の先儒大塚退野（一六七七—一七〇五）に学んだと述べており、このことは先人の研究において明らかにされてきた²²⁾。しかし、学問における政治性を「三代の治道」に見い出すに至った要因として、水戸学との否定的連関が存在したことは以上のことから充分に考えられる²³⁾。

小楠の「三代の治道」の内実がさらに深められる契機となったのは、惣庄屋出身の豪農層を対象にした教育活動を開始したことである。これは実学研究会を二分する原因となる。長岡監物を中心とし

る藩士グループは「常ニ実着ニ工夫ヲ下スヲ主トシテ、大学ノ明德モ其目的ヲ天下ニ立テ、其己レニ切ナル処ハ致知誠意ノ実ヲ勤メシムルニ在リ²⁴⁾」というように、為政者の個人的な道徳性を強調したのに対し、小楠を中心とする豪農派グループは「常ニ規模ヲ立ルヲ主トシ、大学ノ明德ヲ天下ニ明カニセント欲スル処ニ於テ特ニ其志氣ヲ奮発セシムルニ在リ²⁵⁾」というように、民衆の意識変革²⁶⁾新民を主張した。それはまた、激動する時代における豪農層の生き方の学問として、その主体性の根拠となるものであった。このような学問共同体において、「三代の治道」から民衆の生活と直結した生産や事業に役立つ実学を引き出す一方、「政事といへるも別事ならず民を養ふが本体²⁷⁾」というように、民生の繁栄を目的とし「専ら民を氣を付けて民の便利をはかり世話致す事²⁸⁾」という、民本主義を基調とする政治理念を明らかにした。言うまでもなく、こうした思想はすべてが小楠の独創によるものではなく、儒学の基本的な政治論である。しかし、儒学が近世封建社会の為政者に受け容れられて以来、このような仁政思想が政治支配を正当づける「たてまえ論」²⁹⁾以上のものではなかったことは、中期から特に幕末にかけて激増する百姓一揆等の歴史事実が証明するところである。小楠のこのような政治理念が「たてまえ論³⁰⁾」としてではなく、或る種のリアリティーを持って主張されたのは、小楠の拠って立つ基盤が豪農層という在野性にあつたからに他ならない。そうすることにより、小楠は状況思考的な政治主義に陥ることなく、学問の内に普遍的な政治的視座を確立しえたのである。小楠はまた藩政批判のみならず、この政治理念の下に、藩政の矛盾は畢竟するに徳川幕府の矛盾によるものとし

て次のように批判した。

幕府の諸侯を待つ国初の制度其兵力を殺ん事を欲するによりて
参勤交代を初大小に隨て造営の助功・両山其他の火防・開門の
守衛且近年に至つては辺警の防守等最營役を極めて各国の疲弊
民庶に被る事を顧みず、又金銀貨幣の事より諸般の制度天下に
布告施行する所幕府の横柄により徳川御一家の便利私營にして
絶て天下を安じ庶民を子とするの政教あることなし⁽²⁸⁾。

政治と倫理を切り離す、いわゆる近代的思惟に立つのではなく、
政治を倫理の實現とする儒教思想の立場を保持することにより幕府
政治の基本姿勢を批判しえたのである。そうして、この批判を通
じ、やがては共和政体論を發想するに至つた。このような政治論を
展開させた小楠の學問は、「三代の治道」の下に純化し普遍化する
ことにより、人間に対する信頼を深めた。

學問の味を覚え修行の心盛んなれば吾方より有徳の人と聞かば
遠近親疎の差別なく親しみ近づきて咄し合えば自然と彼方より
も打解て親む。是感応の理なり。此朋の字は學者に限るべか
らず、誰にてもあれ其長を取て學ぶときは世人皆吾朋なり⁽²⁹⁾。
學ぶことによる主体的營為が類としての人間の平等意識を喚起さ
せ、それはさらに拡大されて、「此義を推せば日本に限らず世界中
皆我朋友なり⁽³⁰⁾」という、人類平等觀をもたらし、開国から國際平和
の實現という世界觀を形成するのである。

二、実学思想の構造

前節においては、小楠の実学が「三代の治道」の実践という形で

登場してきた過程を明らかにしてきたが、ここでは、その実学の思
想構造にたちいて、儒学が如何に革新されて「現在」という時勢
觀念を持つに至つたかを考察したい。

小楠は「三代の治道」へと至る過程において、朱子学を「三代の
治道」を受け継ぐものと把えていた。小楠によれば、「永樂大全行
候より學者是を以朱学之要典といたし、和漢古今尊奉いたす事に相
成候⁽³¹⁾」と述べているように、後世の學者は明の永樂帝の勅命で編集
された朱子学の解説書を唯一の教科書として用い、枝葉末節に拘泥
して「曾て力を朱子原書に用ひ不申候間一向に力弱して知識通り
不申、口まねをいたし候⁽³²⁾」という有様に墮落してしまつたとい
うのである。そこで小楠は、解説書によらず、朱子の原典にあたるこ
とによつて直接に朱子に帰らなければならぬと主張した。それには
「徒に書を読其義を講ずるを以て問学⁽³³⁾」とする従来の學問方法で
はなく、「今朱子を學ばんと思ひなば朱子の學ぶ処如何んと思ふべ
し。左なくしては朱子の書に就ときは全く朱子の奴隸なり⁽³⁴⁾」とい
うように、朱子が有していた問題意識や學問態度を追体験しなければ
ならないのである。このように、朱子の學問方法や態度を追
体験するには「学の義如何ん。我心上に就て理解すべし。朱註に委
細備はれども其註によりて理解すれば則朱子の奴隸にして学の真意
を知らず」、つまり、自己の問題意識を鮮明にし、そこから出発し
て既成事実⁽³⁵⁾に拘束されることなく、主体的に思索して現在を認識し
うる自立性が前提とされた。ここに至つて、既に朱子学を相対化する
視座が確立されている。小楠は學問をする者の主体性を重視する
ことにより、朱子学にアプローチすることを提唱したのであるが、

そこからさらに実践的契機を引き出すことによって、遂には朱熹まで批判しなければならなかった。問題は「格物致知」の解釈をめぐる展開されるのであるが、ここで朱子学における格物致知及び実学の意味について触れておきたい。

朱子学の形而上学的特質は、「理」と「氣」により人間を含む宇宙のすべてが理解されるところにある。「理」は宇宙における根本原理とされ、形而下においては「氣」とともに万物の存在を可能ならしめる。その際、「理」は万物に超越すると同時に万物に内在して普遍性_{||}同質性を保障し、「氣」は万物の形態_{||}個別性を賦与する。また、「理」は人間に内在すると「本然の性」と呼ばれ、「氣」は「氣質の性」と呼ばれる。そうして「氣質の性」には清明混濁の差異があり、人間の差別実体を含めた諸々の邪悪は、「氣質の性」が「本然の性」の顕現を遮断する結果として生じるものと考えられた。そこで、人間が氣質を変化させて「本然の性」を体認し、本来在るべき姿にたち帰る、つまり聖人に至るために、守静持敬_{||}居敬と、格物致知_{||}窮理の二通りの方法が考えられた。前者は禪に類似した静的な自己省察により、「本然の性」を悟り、それを保持して行く主観的な方法である。これに対して後者は事物を客観的に考察し、その事物に内在する「理」を明らかにして行くことにより、やがては「本然の性」を体認することができるという、いわば客観的な手続きによる方法である。このように、事物の「理」を究める客観的行為が人間の本質_{||}「本然の性」を自覚する主観的行為に連結するのが格物致知における認識論の特色でもある。そうして、対象を認識する行為が自己認識に直結し、自己認識は修身・齊家・治国

・平天下というように、つまるところ国家経営に行きつく。こうした朱子学理論は、對抗思想とした仏教の彼岸主義に対して、社会における人間を問題とする現世主義を表明することにおいて「実学」と称することができる。しかし、朱子学の学問的特質は、人生に如する人間の在り方を追求する「修養至上主義」³⁵⁾にあり、極めて求心的・倫理的な性格を持っている。これは、小楠が李退溪や大塚退野を通して学んだところであった。小楠は、そこから学問主体者の自立の論理、つまり実践倫理を修得したのであるが、それをさらに政治的・経済的に具体化するには、哲学体系としての朱子学が有する觀念論を止揚しなければならなかった。

全体聖人の作用利世安民の事業二典三謨にて粗見得可_レ致候。卑陶謨に六府三事允治と有_レ之。六府は水・火・木・金・土・穀の六物を指候て民生日用の財用不可_レ欠者なり。聖人上に在て民生日用の世話をいたされ右の六府をはじめて其用を尽し、物産を仕立て器用に造作し、許大の生道を建立せられたり。是実に聖人代天の大作用なるに朱子之を知らずして五行の氣と穀とを合して六府とすと説けるは大なる誤りにて候。³⁶⁾

『書経』の「大禹謨」によれば、政治の目的である民を養う方法として、生産の基礎となる「水火金木土穀」の六府を明示し、民を教化して人間として自覚させること（正徳）、生産に必要な道具及び交易を明らかにすること（利用）、それに衣食住など生活に必要な道を提供すること（厚生）³⁷⁾があげられている。これに依拠して、小楠は六府を易学的に解釈した朱子を批判した。朱子に対する批判はこれにとどまらず、さらに朱子の格物致知論をも祖上に載せた。

三代治道の格物と宋儒の格物とは意味合の至らざる処有る可し。一草一木皆有理須格³⁹之とは聞えたれども是れも草木生殖を遂げて民生の用を達する様の格物とは思はず、何にも理を つめて見ての格物と聞えたり。³⁹

つまり、朱子の格物はそれを實際の民衆の生活に役立たそうとするものではなく、「物に在るの理を知るを云て総て理の上心の上のみ専ら³⁹」にするものであり、「天人現在の形体上に就て思惟を欠に似たり⁴⁰」というように、現実を目を向けない観念論であると批判した。小楠によれば、堯舜三代の格物とは「現在天帝の命を受けて天工を広むるの心得にて山川・草木・鳥獸・貨物に至るまで格物の用を盡して、地を開き野を經し厚生利用至らざる事⁴¹」のないものであった。これこそ、小楠の主張した真の実学に他ならない。このようにして、小楠は性即理説に基づく求心的な格物致知を「民生の用」に役立つ実学へと転回させたのであるが、小楠の実学思想を構成している他の要素として、「理」と「天」についての解釈があった。小楠は、「天」と「理」を同一視した「宋の大儒」（朱子）を「天と云ふも多く理を云、天を敬すると云ふも此心を持するを云ふ」といつて批判した。⁴²つまり、朱子学においては非人格として扱えられた「天」を宇宙を主宰する人格的なものと考えた。そうして、人民は「天」の所有するものであるから、人民の生活を安定し人民に役立つ実学は「現在此天帝を敬し現在此天工を亮る経綸⁴³」というように、藩や幕府に奉仕するものではなく、「天」に対する協業として意義づけられた。他方、小楠の「理」についての解釈は「現在」という時勢観念を附与すると同時に、人間の主体性を促した。小楠は

「古今勢異候。勢に隨ひ理亦不同候⁴⁴」⁴⁴といて、過去と現在の状勢を区別し、理もまた過去と現在とでは異なる⁴⁵と述べ、「理と勢とはいつも相因て離れざる者に候⁴⁶」、つまり「理」を歴史状勢と不可分なもの⁴⁷と考えた。そうして、現在の「理」を認識するには次のような心構えが必要であるという。

全体己に思ふの誠なければ後世の如く幾千卷の書を読候ても皆帳面しらべなるものに候。先書は字引と知べく候。一通の書を読得たる後は書を抛て專己に思ふべく候。⁴⁶

つまり、過去の「理」は現在の状勢とは合致せず、現在の「理」を認識するには過去の「理」について書かれた書物のみでは不可能であるという。そこで、現在という歴史状勢に存在している人間の「己に思ふ」行為が必要となってくる。それは、「理」の先驗性に規定されずに主体的に歴史状勢や事物を認識することを意味している。だが、これと同時に小楠は、「現在」を重視して主体性を強調するあまりに、その結果として陥りやすい固守偏見に対しては「思ふに是を古人に照さざれば一己の私智になることも御座候⁴⁸」⁴⁸というように、主体的な発想の検証の必要性についても述べている。このようにして、小楠は実学の視座を確立したのであるが、実学が天の協業である限り、それは人間の在り方を問う倫理と切り離しては考えられなかった。

私の字己に私するときは不義の名たり、是を以て人を利するときは仁の用たり。仁の体は固より己に在て、仁の用は利物に
あることに候。⁴⁸

小楠の実学はあくまでも「仁の用」でなければならなかった。小

楠の学問の目的が「三代の治道」という道徳的政治理念を骨子とする倫理の修得及び実践にあったことは既述した通りである。そうして、その政治は「政事と申せば直に脩己に帰し、脩己れば即政事に推し及し⁴⁹」というように、道徳を前提としたように、実学も「仁の体」たる人間の確乎とした道徳修養を前提とした。従つて、この大前提を抜きにした如何なる社会的実践もありえなかつた。小楠は、実学が単なる技術として倫理 $\parallel$ 道徳学から独立することによつてもたらされる弊害について、たとえば西洋の学問を例にして次のように述べている。小楠によれば、「西洋の学は唯事業之上の学にて、心徳上の学に非ず。故に君子となく小人となく上下となく唯事業の学なる故に事業は益々開けしなり⁵⁰」、つまり、「事業の学」 $\parallel$ 技術であつたが故に、人間の在り方を問うことなく容易に発展してきたというのである。こうした発想は「彼方の学のごときはたゞ其形と器とに精しき事を、所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず」という、新井白石（一六五七—一七二五）以来の西洋の学問に対する見方と大した相違はない。しかし、小楠は、「心徳の学」（人間学）に裏付けされていない「事業の学」（技術）のもたらす結末について、さらに一歩ふみこんで

考察をすすめる。

其心徳の学無き故に人情に亘る事を知らず、交易談判も事実約束を語るまでにて其詰る処ついに戦争となる。戦争となりても事実を詰めて又償金和好となる。人情を知らば戦争も停む可き道あるべし。華盛頓一人は比処に見識ありと見えたり。事実の学にて心徳の学なくしては西洋列国戦争の止む可き日なし。心

徳の学ありて人情を知らば当世に到りては戦争は止む可なり。すなわち、利益の追求のみを目的とする「事業の学」は国家間の衝突を惹起し、つまる所は戦争になるというのである。西洋の学問が単なる利益追求の学問にしかすぎず、人間学をとまなわれないという、西洋の学問に関する小楠の観察は、次章で述べるキリスト教を評価することにより少しは修正されるが、この西洋の学問に対する批判は、とりもなおさずアジアに向けて進出してきた一九世紀中葉以降の西洋先進国の世界政策に見る帝国主義政策に対する批判でもあつた。以上のように、小楠の思想としての実学は対西洋への基軸ともなりえたのである。

三、儒教的世界観と国際平和

「三代の治道」の理念を実現させようとする小楠の実学思想が「心徳の学」という人間学に立脚し、それはまた西洋資本主義の「戦争」政策を批判するものであつたことは前章において明らかにしたところである。こうした学問観は小楠の独自の世界認識を形成させた。小楠の世界認識を特徴づけるものとして、その開国論及びキリスト教理解があげられる。

小楠の対外意識は嘉永六（一八五三）年六月のペリー来航を契機として高揚する。それより以前に、小楠は藤田東湖との交友を通して後期水戸学に接していたが、後期水戸学が一貫して主張してきた外国に対する国家的危機意識は、当時の小楠にはそれほど大きな影響を及ぼしたとは考えられない。小楠の主たる関心は、寧ろ、個人の道徳修養が如何にして現実の諸問題を処理しうる政治的实践と結

びつかかという学問刷新と藩政改革とにあった。その後、藩政や時習館とかかわりを断たれた中で、実学研究会及び実学豪農派を中心とした教育活動を通して、「三代の治道」を唱導するに至っていたにもかかわらず、ペリー来航に際しては「江戸を必死の戦場と定め、夷賊を糞粉に致し、我が神州之正気を天地に明に示さずんばある可からず」というように、水戸学の攘夷論をもって西洋のインパクトを受け止めている。しかし、同年の十月に草した『夷虜応接大意』によれば、「凡我國の外夷に処するの国是たるや、有道の国は通信を許し無道の国は拒絶するの二ツ也」と述べて、条件付きの開国論に転じている。この僅か二カ月余りの間に、何故に小楠が条件つきにもせよ開国を認める方向を打ち出してきたかは、史料的には知るすべはない。植手通有氏はこの経過を「戦略的観点する攘夷不可能論」によるものと説明しておられる。しかし、この時点における小楠の対西洋政策の中には軍事的観点は重要な位置を占めておらず、また「惣じて和と云ひ戦と云ひ遂に是一偏之見にて、時に応じ勢に隨ひ其宜敷を得候道理が真道理と奉₍₅₅₎存候」というように、「無道の国」に対する攘夷を必ずしも断念した訳ではない。植手氏のいわれる戦略的観点よりも、寧ろ、この二カ月余りの間に、小楠は水戸学的立場から持論の「三代の治道」に立ちもどり、そこから西洋に対する対応論理を引き出すことによつて開国への足がかりをつかんだと見るべきであろう。この対応論理の基軸となつたのは「天下」概念の地理的拡大と「理」の普遍化及び世界における人間同質観である。「天下」を全世界をつつむものと見るならば、当然「理」及び「道」も世界的なものとなり、「有道無道を分たず一切拒絶するは

天地公共の真理に暗して遂に信義を万国に失ふに至るも必の理也」という論理が生まれてくる。そうして、「信義を主として応接する時彼又人也、理に服せざる事不能」というように、西洋を対国家の次元にとどまらず、対人間の関係で扱えようとする。学問を通して、身分上下の区別や人種の区別なく「世界中皆我朋友なり」という人間観を持つに至つたことは既に述べたが、人間である以上、西洋人にも「理」が貫徹していることになる。それを小楠は「天地公共の真理」といい、「理」の持つ真理性を国際社会にも共通するものと考へた。このように、「三代の治道」が西洋を見る際の基本的な視座となると、西洋拒否の立場を貫く水戸学が否定され、安政二（一八五五）年には明確に開国論を主張するに至つた。それと同時に、小楠の西洋についての関心は益々深まる。

君聞かずや、洋夷各国治術明らかなるを。励精して能く上下の情に通ず。公に人才を撰びて俊傑挙がる。事あらば衆に詢り、国論平かなり。薄く税斂を征し、民貧しからず。厚く錢糧を貯え経兵を養う。

西洋の長所をこのように積極的に評価するのであるが、特に「宇内の戦争を息る」、「智識を世界万国に取て治教を裨益する」、「全国の大統領の権柄賢に譲て子に伝へず、君臣の義を廢して一向公共和平を以て務」とするワシントン以来のアメリカの三大政策や、「政体一に民情に本づき、官の行ふ処は大小となく必悉民に譲り、其便とする処に隨て其好まざる処を強ひず」とするイギリスや、その他各国に設置されている学校・病院・幼院・啞聾院等に対して、小楠は「政教悉く倫理によつて生民の爲にするに急ならざるはな

し。殆三代の治教に符合するに至る」と述べている。⁶²つまり、西洋の中に「三代の治道」との合致点を見出したのである。さらに小楠は、こうした西洋の政治を支える、いわば西洋精神としてキリスト教に着目した。

小楠は「全体耶蘇にも八派ほど分れ候て、其内西教と申すは尤も晩近に起り、只今英・墨等の国に専ら流行致し——筆者略⁶³」と述べ、とりわけ西教に注目し、「我天文之頃渡候吉支丹とは雲泥の相違⁶⁴」と述べている。天文期にもたらされた「吉支丹」との相違点として、先ず「其宗意たる天意に本き彝倫を主とし拟教法を戒律としたし候。上は国主より下庶人に至る迄真実に其戒律を持守いたし、政教一途に行候教法と相聞申候⁶⁵」というように、国家統治の原理として機能することをあげている。次に、地上に神の国を建設するというプロテスタントの教義は文明を生み出す実学を奨励したのであるが、それについてはこのように述べている。

大抵其学の法則は経義を講明するを第一とし、其国之法律を明弁し其国之古今之事歴より天下万国之事情物産を究、天文・地理・航海之術及海陸之戦法・器械之得失を講究し、天地間之知識を集合するを以て學術といたし候由⁶⁶。

以上のように、キリスト教及びその学問はともに国家経営に欠くべからざるものであり、小楠の依拠する「三代の治道」と同様の機能を有するものと考えられた。しかし、これらは決して西洋讚美ではなく、小楠の西洋観の背後には幕末の日本が置かれていた国際状況下における危機意識が存在したことはいうまでもない。つまり、キリスト教という西洋精神に対して、それに対応しうる原理(三代

の治道)を政治の中心に据えなければならないというのである。

西洋に正教あり。洋人自ら正教と稱す其教上帝に本づき戒律以て人を導く。善を勧め悪戾を懲す。上下これを信奉す。教に因て法制を立て治教相離れず。是を以て人奮励す。我に三教ありと雖も人心繫ぐ所なし。□八良く荒唐し、儒また文芸に落つ。政道と教法とは贖贖として其弊を見る。洋夷交りて港を通ずるに必ず貨利を以て曳く。人心は異教に溺れ禁じ難きは是其勢なり。嗟乎唐虞の道。明白に朝霧の如し。之を捨てて用いるを知らずんば、甘んじて西洋の隸と為る。世豈魯連なからんや。去りて東海を踏み斃れん⁶⁷。

日本には、神道・仏教・儒教があるが、いずれを取ってみてもキリスト教に対抗しうるものではないという。こうした状態で西洋との接触がはじまれば、西洋の支配を受けるのは必至であるといっている。小楠は、日本を救う唯一の方法として、「三代の治道」を今こそ実現しなければならぬと考えた。

以上のように、西洋との緊張関係のもとに小楠は「三代の治道」に依拠して西洋を分析し、西洋精神としての基督教を発見するに至った。基督教や西洋の政治制度を儒教的に解釈するという小楠の世界に対する認識方法は、同時に「三代の治道」を一種のインターナショナルリズムへと読みかえて行く方向をもたらした。つまり、西洋が有する価値体系は、小楠の儒教的世界観に包括されるものとみなされたのである。こうした世界認識は、幕末の歴史段階においては非常にユニークな開国論を展開させた。

天地の気運と万国の形勢は人為を以て私する事を得ざれば日本

國の私を以て鎖国するは勿論、たとひ交易を開きても鎖国の見を以て開く故、開閉共に形の如き弊害ありて長久の安全を得難し⁽⁸⁾。

開国は人為ではどうすることもできない「天地の氣運」であり、それに逆つて鎖国を固守するのは日本の国家的エゴイズムであるという。しかも、国家的エゴイズムの立場を取る限り、たとえ開国をしたところで、それは「世界公共の実理」になつた眞の開国ではなかつた。小楠は、「三代の治道」を世界に実現することこそ眞の開国であり、國際社会における日本の役割でもあると主張した。

堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を盡す。

何ぞ富國に止まらん、何ぞ強兵に止まらん。大義を四海に布くのみ。⁽⁹⁾

小楠は富國強兵をスローガンとした國家主義ではなく、「三代の治道」を世界に実現するというインターナショナルリズムの方向で開国を位置づけた。そうして、このインターナショナルリズムとは「今各國戦争ノ慘憺実ニ生民ノ不幸之ヲ聞クニ忍ヒス。故ニ米國ト協議シテ以テ戦争ノ害ヲ除ク可ナリ」というように、世界の人民を救済し、戦争を地上から追放する國際平和の実現を内容とするものであった。この儒教的インターナショナルリズムこそ、小楠の西洋への対応思想であり、かつナショナルリズムの帰結であつた。小楠がこうした世界観を持つに至つたのは、即物的な技術主義や政治主義に陥ることなく、人間学に基づいた学問の普遍性に対する確信によるものであった。しかも、こうした学問を既成の権力組織においてではなく、実学豪農派という在野勢力を背景に形成してきたことに

より、時代を批判し、そうして時代を超越した思想を展望しえたのである。

小楠の思想は、明治三（一八七〇）年肥後藩における実学豪農党政権の樹立という形で受け継がれ、上院・下院の二院制による議會主義や民生政策、諸役人の公選制など、その基本方針は小楠が最後に辿りついた「市民社会」を実現しようとするものであつた。明治六（一八七三）年に明治政府の彈圧により、実学豪農党政権は解体するのであるが、その中からは民権運動を組織したり、また彼らが残した熊本洋学校からはキリスト教に入信し、市民社会の実現をめざして多大の貢獻をした人々が輩出した。こうしたことは、小楠の学問と政治が如何なるベクトルを有していたかを如実に語るものである。（昭和五十四年八月成稿）

注

- (1) 『日本教育史資料』三、一九六頁。
- (2) 『時習館学規』（原漢文）『日本教育史資料』三、二〇三頁。
- (3) 『時習館学規科条大意』『日本教育史資料』三、二〇八頁。
- (4) 前掲「時習館学規科条大意」
- (5) 前掲「時習館学規科条大意」
- (6) 「学校問答書」『横井小楠』遺稿篇（以下、『遺稿篇』と略称）三頁。
- (7) この事件は時習館訓導宅焼打に端を發し藩政に対して、百姓及び千九百石を最高とする上級武士の子弟が一揆の連判状に

名を連ねて反乱を計画したものであり、なかでも、将来藩政にかかわる上級武士の子弟が参画していたことは、藩当局は勿論のこと時習館にも大きな衝撃を与えた。(鎌田浩著「熊本藩の支配機構」)『熊本法学』一九号所収、参照。

(8) 松浦玲著『横井小楠』一〇頁。

(9) 藩校教育の目的を人材育成に置くのは近世全般の藩校に共通するところであるが、その意味と実際の機能については各々の藩や時期によってかなりの相違がある。領主支配が比較的安定した宝暦期の肥後においては、その政策は台頭しつつある変革エネルギーを抑止し、藩政の矛盾を体制秩序の維持という方向で乗り切ろうとするものであった。従って、そこにおける人材教育の役割は、崩れつつある封建秩序を支える秩序志向型人間の創出にあった。これに対し、「外庄」の出現と武士層の政治意識が高揚した幕末に至ると、秩序イデオロギーのみでは対処できない情勢となる。ここにおいて、下級武士の持つ変革エネルギーを積極的に藩政に取りこみ、挙藩一致のもとに改革に着手する方向がとられる。改革志向型人間の創出を目的とする人材教育は、藩校が藩政の中枢に位置づけられた時、極めて現実的な政治課題を担って登場する。

(10) 「寓館雜志」(原漢文)『遺稿篇』七八〇頁。

(11) 「小楠先生遺文後序」『横井小楠』伝記篇(以下、『伝記篇』と略称)四〇頁。

(12) 「時務策」『遺稿篇』六九頁。

(13) 藤田東湖「弘道館記述義」巻の下、『水戸学』日本思想大系、三二八頁。

(14) 藤田東湖前掲書、三三六頁。

(15) また会沢正志斎の「学制略説」にも「政治ノ原ハ道徳仁義ヲ以テ其根本トスル」(『日本教育史資料』五、四五九頁。)と説かれており「古ハ治ト教トラ一ニシテ政治ハ道徳仁義ヲ本トシ教法ハ政治ヲ羽翼」(同上)することが実学であると述べられている。

(16) 「弘道館記述義」巻の上(前掲書三七七頁。)

(17) 「遊学雜志」『遺稿篇』七九九頁。

(18) 元田永孚「還暦之記」『元田永孚文書』巻一、三四頁。

(19) 元田永孚前掲書、三五頁。

(20) 元田前掲書、二七頁。

(21) 「沼山閑居雜詩」(原漢文)『遺稿篇』八八〇頁。

(22) たとえば、今中寛司著「小楠学の儒教的思想形態について」(『史林』五二巻一号)や阿部吉雄著「日本朱子学と朝鮮」が代表的である。

(23) 実学研究会の「三代の治道」は小楠の発想によるものであることをここで明かにしておきたい。この研究会は小楠の婦国以前より、徂徠の『政談』や蕃山の『集義和書』をテキストとして長岡監物を中心に既に発足していたが、小楠の参加により初めて「実学ノ権輿トス」(「還暦之記」)と述べられている。

(24) 「還暦之記」(前掲書、五八頁。)

- (25) 元田前掲書。
 (26) 「国是三論」『遺稿篇』三八頁。
 (27) 「沼山對話」『遺稿篇』九〇五頁。
 (28) 「国是三論」(前掲書、三九頁。)
 (29) 「講義及び語録」『遺稿篇』九三三頁。
 (30) 『遺稿篇』九三三頁。
 (31) 「本庄一郎宛書翰」嘉永二年八月、『遺稿篇』一一二八頁。
 (32) 同書翰、『遺稿篇』一三一頁。
 (33) 同書翰、『遺稿篇』一二九頁。
 (34) 「講義及び語録」(前掲書、九三三頁。)
 (35) 阿部吉雄著『日本朱子学と朝鮮』五四一頁。
 (36) 「沼山對話」(前掲書、九〇三頁。)
 (37) 『書経』中国古典新書、四六頁。尚、原文は次の通りである。「政在養民。水火金木土穀惟修、正徳利用厚生惟和」
 (38) 「沼山閑話」『遺稿篇』九二三頁。
 (39) 同書、九二二頁。
 (40) 同書。
 (41) 同書。
 (42) 同書。
 (43) 同書。
 (44) 「沼山對話」(前掲書、九〇七頁。)
 (45) 同書。
 (46) 同書、八九一―八九九頁。
 (47) 同書、八九九頁。
 (48) 同書、九〇六頁。
 (49) 「学校問答書」(前掲書、四頁。)
 (50) 「沼山閑話」(前掲書、九二六頁。)
 (51) 新井白石『西洋紀聞』(岩波文庫)、二四頁。

- (52) 「沼山閑話」(前掲書、九二六頁。)
 (53) 「藤田東湖宛書翰」嘉永六年八月、『遺稿篇』二〇四頁。
 (54) 「夷虜応接大意」『遺稿篇』一一頁。
 (55) 植手通有著『日本近代思想の形成』七六頁。
 (56) たとえば、嘉永六年七月の吉田憐蔵宛書翰によれば、現在の急務として人才登用を主張し、「若し然る事に不相成しては例の海防家之説行はれ、軍艦の大炮のと防禦之用意迄に至り候へば寒心に耐え不_レ申」(『遺稿篇』一九八頁。)と述べ、後の安政二年の「陸兵問答書」や元治元年の「海軍問答書」などに見られる軍事的観点は導入されていない。
 (57) 「吉田憐蔵宛書翰」安政元年九月、『遺稿篇』二二六頁。
 (58) 「夷虜応接大意」(前掲書一一頁。)
 (59) 同書、一三頁。
 (60) 安政二年三月の立花亨岐宛書翰には「水府之学一偏に落入り天地之正理を見不_レ申処より其流義之大節義を却て失ひ候様に罷成り恐敷事に御座候」(『遺稿篇』二二二頁。)と述べられている。
 (61) 「小楠堂詩草」(原漢文)『遺稿篇』八七九頁。
 (62) 「国是三論」(前掲書、四〇頁。)
 (63) 「沼山對話」(前掲書、九〇〇頁。)
 (64) 「村田巳三郎宛書翰」安政三年二月、『遺稿篇』二四三頁。
 (65) 同書、二四三頁。
 (66) 同書。
 (67) 「沼山閑居雜詩」(原漢文) (前掲書、八八一頁。)
 (68) 「国是三論」(前掲書、三三頁。)
 (69) 「送_二左太_一姪洋行」(原漢文)『遺稿篇』五六二頁。
 (70) 「還曆之記」(前掲書、六八頁。)